



(図1) 巻末部分 夫婦となった山三郎と葛城の祝宴の場面 江戸時代

伝英一蝶「名古屋山三郎絵巻」

紙本着色 江戸時代 縦31.1×全長1475.3cm

◆◆館蔵品紹介◆◆

歌舞伎十八番の一つに「不破」という演目がある。不破伴左衛門と名古屋山三郎という二人の伊達男が遊女・葛城を巡って争うという内容で、現在の歌舞伎では、四世鶴屋南北作「浮世柄比翼稲妻」の中の一部を独立させた、「鞘当」として上演されている。いわゆる“不破名古屋物”と呼ばれるものであるが、その源流は土佐浄瑠璃「名古屋山三郎」である。土佐浄瑠璃は延宝から宝永に至る頃(1673～1710)に江戸で流行した浄瑠璃で、「名古屋山三郎」はその中でも初期のもの、延宝頃の作と推定されている。

「名古屋山三郎絵巻」は、この土佐浄瑠璃「名古屋山三郎」を絵巻にした作品であり、遠山記念館では計4点の絵巻を所蔵している。その内、「伝英一蝶」とされてきたものが1点(A本)、作者不詳のものが2点(B,C本)、一蝶の弟子である英一舟の落款がある白描模本が1点(D本)である(表1)。詞書がついているのは遠山C本のみで、他の巻と異なり2巻本である。本稿では、遠山A本の全図を掲載し、紹介する。

	作者	巻数	材質	法量(縦×横cm)
遠山A本	伝英一蝶	1巻	紙本着色	31.1×1475.3
遠山B本	不明	1巻	紙本着色	37.5×1380.0
遠山C本	不明	2巻	紙本着色	上巻35.5×542.8 下巻35.5×498.7
遠山D本	英一舟	1巻	紙本墨画淡彩	35.0×1419.6

(表1) 遠山記念館所蔵「名古屋山三郎絵巻」一覧

慶應4年(1868)の『新增補浮世絵類考』には「不破名古屋傳奇考」という項目があり、以下のような記述がある。一部抜粋する。

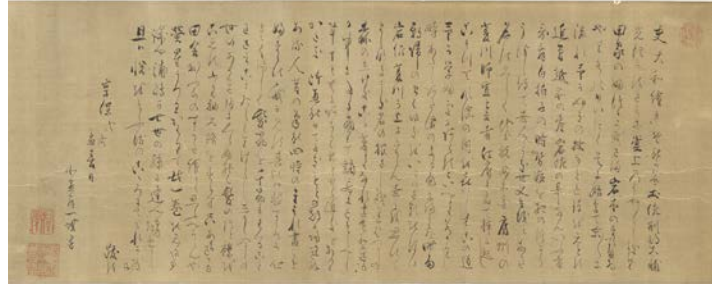
貞享二年の印本に菱川師宣の筆の絵草紙二冊あり。
…(略)…又英一蝶の筆に名古屋山三郎仇討の絵巻物を世に傳ふといへども、詞書なければ殊に詳ならず。
…(略)

このことから、「名古屋山三郎」の物語を菱川師宣(1618?～1694)や英一蝶(1652～1724)が絵画化していたことは確かである。師宣の作例としては、延宝～元禄7年(1673～94)頃の制作とされる「不破名護屋敵討絵巻」(太田記念美術館蔵)がある。

一蝶筆と伝わる「名古屋山三郎絵巻」は当館所蔵本以外にも、国立国会図書館本が以前から知られてきた。一蝶自筆とされる書簡が付されているのであるが、書簡の内容は「名古屋山三郎絵巻」に関連したものではない。また、国立国会図書館本は彩色が少なく、墨か朱色しか用いられておらず、ところどころ「朱アサギ」「あさき」といった色の覚書が記されており、明らかに模本だと言える。一方で、遠山A本は国立国会図書館本と同じ構成の絵巻であるが、人物たちの着物の文様などが細かく描かれ、さらに藍、丹、浅葱、薄紅といった様々な色で鮮やかに彩色されている。建物の線なども真っ直ぐ丁寧



(図2) 遠山A本「名古屋山三郎絵巻」祝宴の場面における山三郎と葛城



(図3) 遠山A本「名古屋山三郎絵巻」巻頭につけられた「四季絵跋」

に引かれていて、全体を通して本画に近い制作となっている。

特筆すべき点は、巻末の祝宴場面である(図1)。これは国立国会図書館本をはじめ、遠山B,C,D本にも描かれている。土佐浄瑠璃「名古屋山三郎」では、最後に山三郎が伴左衛門を討ち果たして本領安堵となり、葛城と夫婦になった、というところで終わっており、こうした祝宴の記述はない。この場面は「名古屋山三郎絵巻」におけるオリジナルシーンと言ってよく、遠山A本では、州浜台を前に三味線を奏でる葛城と、その隣でくつろぐ山三郎が祝宴の踊りを眺める様子が描かれている。州浜台の上には、祝言の演目である「猩々」を舞う人の造り物がある(図2)。

そして、すでに先行研究でも注目されてきたことであるが、遠山A本には一蝶の回顧録である「四季絵跋」が絹本に記され、巻頭につけられている(図3)。一蝶筆の「四季絵」そのものは現存しておらず、跋文だけが江戸時代の諸書(例えば享和2年(1802)の『浮世絵類考』や、文化2年(1805)の序のある伊東蘭洲の『墨水消夏録』など)に転載されていることで知られている。本によって文章に微妙な差異があるため、もはやどの跋文が原本を忠実に写したものであるのか不明の状態である。遠山A本の跋文の冒頭には、「趣在山雲泉石間」の朱文円印が捺され、最後に「享保戊戌 孟春日 北窓翁一蝶書」の落款と「君受」の朱文方印、「志在青松白石間」の白文方印が捺されている。「享保戊戌」は享保3年(1718)にあたるが、遠山A本の跋文は後からつけられたものと考えられるため、「享保3年」を遠山A本の制作年とすることは難しい。また、遠山A本には安政6年(1859)の「古筆了仲」の極め札および添え状があり、そこには「ことのほか出来よろしく」一蝶若年の作だろう

などと、作品に対する評価が記されている。さらに、「狩野勝川法眼」(狩野勝川院雅信、1823～1879)、「狩野永恵法眼」(狩野永恵立信、1815～1891)がこの絵巻を閲覧した際の感想を述べた書簡も残されている。このように付属品が多く、さらに状態が良好であることから、遠山A本が一蝶筆の「名古屋山三郎絵巻」として大切にされ、伝来してきたことが窺える。

一方で、細部の描写に目を凝らすと、畳に置かれた折敷の描き方などにやや雑なところがあり、現時点で遠山A本の作者は「伝英一蝶」に留まるべきであろう。ただ、遠山B,C,D本の一紙の長さがバラバラであるのに対し、遠山A本の一紙は見返し部分と巻末を除けば129～130cmと、一定の長さを継いで作られている。先述したように、全体的に丁寧な筆致で描かれていることから、原本の忠実な模本として制作された可能性がある。「英一舟」の落款がある遠山D本の存在を考えると、英派がこぞって「名古屋山三郎絵巻」を制作する背景があったのではないと思われる。これらのことから遠山A本は、一蝶の原本に極めて近い英派の絵師によるものと考えたい。

(柳澤恵理子)

主要参考文献

- ・鳥居フミ子編『土佐浄瑠璃正本集』第3巻(角川書店、1977年)
- ・鳥居フミ子「土佐浄瑠璃「名古屋山三郎」の先進性」『国語と国文学』58(東京大学国語国文学会、1981年11月)
- ・永瀬恵子「英一蝶の画卷様式一考―「名古屋山三郎絵巻」の制作をめぐる―」『人文論究』35(関西学院大学人文学会、1985年7月)

遠山A本

①



冒頭は上林道順の廓の中の様子が吹抜屋台で描かれる。

②



北面の侍・なごや三郎左衛門正春が一子、なごや山三郎は器量に優れた美男であった。友人の不破伴左衛門も山三郎に劣らぬ伊達男である。二人は北野の杜人・梅津掃部を訪ねる。そのうち島原見物に行こうという話になる。

③



遊女の道中が描かれる。

※固有名詞の表記は、鳥居フミ子編『土佐浄瑠璃正本集』第3巻(角川書店、1977年)による。



④ 妓楼で酒宴を開き、山三郎の相手は葛城、伴左衛門の相手は柏木という遊女であったが、山三郎は急用ができて帰ってしまう。



⑤ 残った伴左衛門は山三郎の相手である葛城に言い寄るが、はねつけられる。



⑦ 伴左衛門は山三郎に恥辱を与えて遊里に通えないようにしようと画策する。一方、なごや三郎左衛門正春は、息子の遊里通いを諫めようとしていた。山三郎を見つけた伴左衛門は言いがかりをつけて切りかかるが、打ち負かされて逃げ帰る。そこで、山三郎の親である三郎左衛門を見つける。せめて親だけでも討ち取って恥辱を晴らそうと、伴左衛門は三郎左衛門を殺してしまう。山三郎はその場に駆けつけたものの、伴左衛門を取り逃がす。



浪人となった山三郎は、こはたの里に引きこもっていた。山三郎を想う遊女・葛城は廓を抜け出し、山三郎を訪ねる。



山三郎と葛城は北野の七本松にて心中を図るが、通りがかった梅津掃部が二人を止める。



葛城は廓に戻されたが、山三郎を恋しく想うあまりに狂女となってしまう、破れ籠に載せられて大坂口に捨てられてしまう。一方、山三郎は西国へ行って立身の目途がついていた。仇の伴左衛門が京にいることを聞いて、多くの供を連れて都へ上る途中、破れ籠の中の憐れな葛城を見つける。

⑫



⑬



⑭



伴左衛門は深編笠に覆面という同じような出で立ちの5人連れで行動していたが、うつせみという女郎が編笠と覆面を取ったため、山三郎は伴左衛門の前に出て名乗り出る。梅津掃部と葛城の加勢もあり、山三郎は伴左衛門を討ち果たす。

⑮



夫婦となった山三郎と葛城は祝宴を開く。

「^{せんめんあおいもんちらしまさき え こうだんす}扇面葵紋散蒔絵香簞笥」について

依田 徹

遠山記念館で所蔵する「扇面葵紋散香簞笥」(図1)は、従来あまり知られていなかった作品である。先代理事長である遠山一行より平成24年(2012)に追加寄贈されたコレクションの一部であり、これまで図録等で紹介されたことはなかった。

まず、本作の概要を確認したい。高さ17.5、幅27.4、奥行15.6cmの長方形の箱である。全体を金梨地とし、底を除いた各面に扇を配し、その余白を埋める様にして三つ葉葵紋を置いている。それぞれの扇には四季の草花や景物を金銀の蒔絵で表しており、一部には金銀の板を張る金貝の手法を用いる。天面には吊り手があり、正面の上部に鍵金具が付いている。この鍵を開錠すると、正面が^{けんどんぶた}儉鈍蓋となって外れ、三段の引き出しが現れる(図2)。この各引き出しの正面にも三つ葉葵紋が装飾的に並べられており、各段の内側には扇、さらに底面にまで梨地蒔絵が施されている。特に良質な金銀粉が用いられており、極めて上手の蒔絵作品に分類される。ただし蒔絵が緻密である事、保存状態が良好な事などから、当館では18世紀、江戸中期の制作と判断していた。

本作の箱には「扇面蒔絵香簞笥／尾州家旧蔵」と墨書されており、これまで漠然と尾張徳川家の旧蔵と見られていた。最近になって、かつて徳川美術館に奉職されていた龍澤彩氏(金城学院大学教授)より、この蒔絵が徳川美術館で所蔵する「^{よしなお}苧田蒔絵小鼓胴」(図3)の付属品である、「葵紋扇散蒔絵鼓箱」と同じ意匠であると御教授をいただいた。「^{よしなお}苧田蒔絵小鼓胴」は、慶長16年(1611)に尾張藩の祖である徳川義直(1601～1650)が父家康の使者として大坂城に上った際、豊臣秀頼から拝領したという謂われを持つ、特別な作品である。尾張徳川家の家宝の一つであり、これを納めるための特別な箱として、江戸時代初頭に誂えられたのが「葵紋扇散蒔絵鼓箱」となる。

「葵紋扇散蒔絵鼓箱」は本作と同じく、金梨地に扇面を散らした蒔絵箱である。金貝を多用する技法や、扇の隙間を埋める様にして三つ葉葵紋が配される表現も近似している。特に三つ葉葵紋に注目すると、三枚の葉の間に余白が広くとられている点が近い。尾張徳川家の三つ葉葵紋は江戸時代後期に向うにつれ葉が大ぶりになり隙間が小さくなるとされ、両者は近い時期に同じ工



図1 扇面葵紋散香簞笥



図2 扇面葵紋散香簞笥(蓋を外した所)

図3 苧田蒔絵小鼓胴 附 葵紋扇散蒔絵鼓箱
徳川美術館蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPpartcom

房で制作された兄弟作品の可能性が出てきた。このため制作年代も、かつて18世紀としていた所を、17世紀まで遡らせて良いと思われる。

本作には来歴に関する重要な資料として、次の添状(図4)が付属している。

鬼頭幸七殿 徳川家従

舊負債事件ニ付、追々御尽力被成下候ニ付、此品従一位殿ヨリ貴殿へ被下候付具出申候、委細ハ伊東太一郎殿相傳述申度、此間及可被下候也

十月十六日

文中に「従一位殿」とあるが、尾張徳川家で従一位となったのはただ一人、徳川義勝(1824～1883)のみである。江戸時代、徳川御三家の中では紀州藩の徳川治宝(1771～1853)が生前では初めて従一位に上り、御三家筆頭である尾張藩は後塵を拝する形となっていた。義勝は明治元年(1868)の鳥羽伏見の戦いの後、藩内の佐幕派を抑え込み(青松葉事件)、新政府に恭順する形で尾張藩をまとめ、これにより新政府軍は東海道を混乱なく進むことができた。こうした功績により、新政府は翌2年に義勝に特例として従一位を出している。義勝は同16年に死去しているため、この添状はそれまでの15年の間に記されたと確定できる。

宛名の鬼頭幸七(?～1905)は、名古屋を代表する大店である松坂屋の番頭であり、当主である伊藤祐昌(1848～1930)から別家として重んじられた。また文中には「旧負債」という文言があり、明治初年の尾張藩の藩債に関連するものと判断される。明治初年、政府が発行した太政官札は政局の不安定さから信用を失った。この時、尾張藩では御用達商人筆頭であった伊藤家、関戸家に多くの債権者が押し掛けたとされる。この時の様子を『伊藤家伝』は次の様に記す。

祐良、祐昌、締元締の鬼頭幸七(初代)が額をあつめて協議した結果、当主祐昌が債権者の家を一軒一軒廻り、その事情を述べ了解をこうことにした。この手段を思いついたのは幸七で、「伊藤家の当主がわざわざ出向いて御挨拶になれば、いくらわからず屋の人でも一応はなっとくしてくれるでしょう。なに、旦那様は頭をさげて何分よろしく頼みますと下されば、あとは手前がよしなに計らいます。そうと決まったらさっそく明日からでも廻りましょうか。火の手があがらぬうちに、火は消さねばいけません」そういって主人祐昌を伴って家々を廻った。幸七は当時の藩の事情やら、伊藤、関戸両家の立場を説明して、「主人もこうして出ましてのお願いでございますので、何分の御了解を得たいと存じます」というと流石日頃口うるさい人々も“御当主自らわざわざの御挨拶は痛みいります”と難物と思われたこの問題も難なく解決することが出来た。

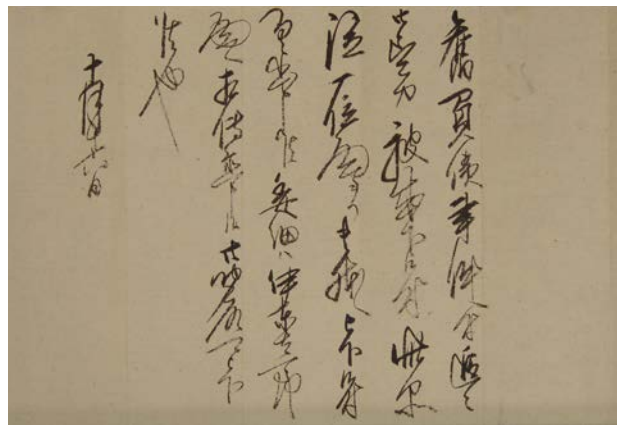


図4 扇面葵紋散香筆筒添状

また明治6年、新政府は天保14年(1843)以前の藩債を失効、弘化元年(1844)から慶応3年(1867)までの藩債を50年賦無利息とする布達を出した。この時も尾張藩の債権問題が再燃し、関戸家では当主が心労で死去している。松坂屋では祐昌が同7年6月より約一月間、東京へ上って旧藩主である政府や義勝等に嘆願した。この時期の鬼頭について、『伊藤祐民伝』は次のエピソードを伝える。

之に随行した別家の初代鬼頭幸七は、毎夜深更金毘羅神社に跣足詣りをして、尾州家の安泰と伊藤家の無事を祈り、其の後引続き主人を輔け孜々として精励し、つひに藩債の弁償を遂げた。

こうした運動の結果、尾張徳川家では貯木場の材木等を売却して対応し、明治8年には藩債問題が一応の解決を見た。先の引用文中でも鬼頭が存在が強調されていたが、祐昌はこの間の働きを労うため、鬼頭に対し皆戸町の家屋を与えている。本作も同様に、尾張家からの藩債処理に対する褒章と見て良いだろう。添状にある伊東太一郎の名前も、尾張藩士として足跡が見られる。

松坂屋では鬼頭家を始めとする七つの別家について、血統ではなく優れた社員を養子として迎えるしきたりがあった。このため鬼頭家は二代幸七を経て、松坂屋の名番頭として中京財界において重んじられた三代幸七(渡辺伊之助)へと継がれる。本作はいずれかの時期に鬼頭家を離れたらしく、遠山元一の所蔵となったのは戦後と見られる。(当館学芸課長)

主要参考文献

- ・松坂屋伊藤祐民伝刊行会編『伊藤祐民伝』松坂屋伊藤祐民伝刊行会、1952
- ・岡戸武平『伊藤家伝』中部経済新聞社、1957
- ・『店史概要 新版』松坂屋、1964

テーマ展「舞いの造型—英一蝶^{ぬのさらしまいず}「布晒舞図」と安田靫彦「風神雷神図」—」
9月19日(土)～11月15日(日)

舞踊は、人類最古の芸術と言われています。日本においては、古くは神への奉納を目的とした「神楽舞」や雅楽の伴奏に合わせて舞う「舞楽」があり、庶民にとっては「念仏踊り」や「盆踊り」などが日常生活の中に溶け込んでいました。舞踊は、身分を問わず誰でも身一つで表現できるものであり、人々が舞い踊る姿は、しばしば絵画や彫刻などで表されてきました。

本展は、遠山記念館コレクションの中に見られる“舞い”の造型をテーマとした展覧会です。特に、当館のコレクションの中でも屈指の人気を誇る英一蝶の「布晒舞図」(重要文化財)と、安田靫彦の「風神雷神図」を中心に紹介します。そのほかの日本絵画では、江戸時代前期の作と考えられる「輪舞図」や田中針水(1902～1979)の「鏡獅子」などを、彫刻作品からは、長谷川栄作(1890～1944)「太平楽」「春庭華」を展示します。



英一蝶「布晒舞図」 江戸時代 17～18世紀 重要文化財



田中針水「鏡獅子」 昭和時代 20世紀



安田靫彦「風神雷神図」 昭和4年(1929)



長谷川栄作「春庭華」 昭和15年(1940)

「舞いの造型—英一蝶「布晒舞図」と安田靫彦「風神雷神図」—」 関連イベント

・特別講座「江戸の風流才子・英一蝶の魅力—「布晒舞図」を中心に—」

10月24日(土) 午後1:30～3:00

講師：池田美美(サントリー美術館 副学芸部長)

会場：遠山記念館事務棟地下大会議室 対面式(Zoom参加も可能) 定員：50名(先着)

参加費：500円(入館料別途) お申込み方法：当館公式サイト申込みコーナーから

コレクション展2

11月28日(土)～1月24日(日)

年末から年始にかけてのコレクション展です。遠山記念館の所蔵品の中から、新年の干支である羊を主題とした石川光明「羊」と円山応挙「黄初平図」をはじめ、「梅に弓箭箆模様小袖」など、新春をお祝いするのにふさわしい染織品や工芸作品を選んで展示いたします。

円山応挙「黄初平図」
安永6年(1777)



石川光明「羊」
明治44年(1911)



「梅に弓箭箆模様小袖」
江戸時代後期 19世紀



テーマ展「雛の世界」

2027年2月6日(土)～3月22日(月・祝)

江戸期に人形文化が開花し、独自の雛人形を母体に多彩な人形が登場しました。立雛(次郎左衛門頭)、享保雛、古今雛、芥子雛など様々な雛人形のほか、今年新たにご寄贈いただいた、昔話や武者、高砂、歌舞伎などを題材とした「浮世物」と呼ばれる人形も展示します。これらは節句飾りの添え物として制作された人形で、その多彩な題材を通して、当時の人々に親しまれた物語や人物の世界をご紹介します。このほか、子どもの姿を愛らしく表した抱き人形もあわせて展示します。

また遠山邸では、十畳の座敷いっぱいに広がる恒例の雛壇飾りと、昨年度好評だった西棟の明治・大正・昭和時代の段飾りを、それぞれ展示します。時代も姿も様々な人形たちが一堂に会する、遠山記念館ならではの雛祭りをお楽しみください。



「立雛(次郎左衛門頭)」 江戸時代中期～後期
18～19世紀

・「雛祭りの日」ガイドツアー

2月27日(土)、2月28日(日)、3月6日(土)、

3月21日(日・祝)

午後1:30～3:00

会場：美術館・遠山邸 参加費：無料(入館料別途)

当日午後1時30分に美術館ロビーに集合、担当学芸員が「雛の世界」展と「遠山邸」を解説します。



浮世人形「舌切り雀」 昭和時代 20世紀

2025年度 新収蔵品

つぎの作品及びコレクション等のご寄贈をいただきました。心より感謝申し上げます、ご紹介いたします。

◇梶野 殖 様

「端石・太史硯」^{まいかい しちようでいけん}、「玫瑰紫澄泥硯・雲海硯」^{きゆうじゆう}、「端石・太史硯」^{きゆうじゆう}、「歙州龍尾石・雙龍争珠硯」^{きゆうじゆう}、「端溪水巖・水精硯」^{きゆうじゆう}、「端溪麻子坑・呈瑞硯」 計6件

◇櫻井 洋 様

前田南斎「香盆」 計1件

◇遠山 公一 様

岡田為恭「騎馬図」^{きうばず}、「春秋遊御蒔絵料紙箱」^{しゅうしゅう}、象彦「高砂蒔絵硯箱(板文庫添)」^{しゅうしゅう} 計3件

◇山辺 寛史 様

「雛段飾り(明治・大正・昭和時代)」 計1件



岡田為恭「騎馬図」(左隻)

2025年度 催事報告

- 4月26日(土) 土曜講座「橋本雅邦と「日本画」」 講師：依田徹(当館学芸課長)
- 10月18日(日) 特別講演会「楊文驄の芸術と亡国—その幕末・明治・大正・昭和への残響」
講師：宮崎法子氏(実践女子大学名誉教授)
- 11月 1日(土) 特別講演会「関東南画の展開とその影響」
講師：村田隆志氏(大阪国際大学教授)
- 2026年 2月21日(土)、28日(土)、3月1日(日)、3日(火) 「雛祭りの日ガイドツアー」

これからの催し物

今秋の遠山邸2階公開日

日 時：9月19日(土)

10月10日(土)

午前11:00～午後3:00

参加費：無料(入館料別途)

通常非公開の遠山邸2階をご覧ください。昭和初期の雰囲気が色濃く漂う和洋折衷の応接室を中心に、庭園を一望できる14畳の座敷など見どころがいっぱいです。



●遠山家雛壇飾り

2027年2月6日(土)～3月22日(月・祝)

雛祭りの季節に合わせ、遠山邸の大広間で十畳の座敷いっぱいに飾られた雛壇飾りをご覧ください。これは遠山元一が、長女貞子(大正9年生まれ)の初節句の祝いとして揃えたもので、京都御所の紫宸殿風の館に人形を飾る「御殿飾り」と、関東風の「段飾り」との二組で構成されています。「御殿飾り」は檜の樹皮で屋根を葺いた檜皮葺きで、すべて組み立て式になっており、また「段飾り」は七段で、特に五人囃子と隨身には日本橋十軒店の名工「永徳斎」の商標が付いています。



遠山家雛壇飾り(大正時代)

●ご来館のみなさまへ●

感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

- ・倦怠感、発熱、咳などの症状のある方は、ご来館をお控えください。
- ・アルコール消毒にご協力をお願いします。
- ・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
- ・作品、展示ケース、壁や柱などにはお手を触れないでください。

利 用 案 内

◇入館料

	一 般	学 生
特別展	1,000円	800円
通 常	800円	600円
展示替え期間	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引

◇開 館 午前10:00～午後4:30(入館は午後4:00まで)

◇休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は翌日)

12月22日(火)～2027年1月3日(日)

2027年2月4日(木)～2月5日(金)

3月24日(水)

◇展示替え期間(邸宅、庭園のみ公開)

11月17日(火)～11月27日(金)、

2027年1月26日(火)～1月31日(日)、2月2日(火)～2月3日(水)、

3月25日(木)～3月31日(水)

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <https://www.e-kinenkan.com>



電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅
 - 西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅
- いずれも「川越駅～桶川駅」間の東武バスで
牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第71号 2026年9月発行

編集発行 公益財団法人 遠山記念館
編集担当 久保木彰一

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
TEL: 049-297-0007 FAX: 049-297-6951